## 12. 下位文化理論とネットワーク分析

（１）都市度とパーソナル・ネットワーク

●都市度（アーバニズム）の定義

人口の集中（ある場所のなかおよびその周辺の人口量）→日常的に接触可能な人口量。

●下位文化の定義

外社会から相対的に区別された社会的ネットワークと、それに結びついた特徴的な価値・規範・習慣。

●下位文化理論の基本仮説

都市は社会的ネットワークの選択性を増大させ、ネットワークを分化させることによって、下位文化を生成させる。

（２）社会的ネットワークの形成原理

●「選択-制約モデル」（Fischer et al. 1977, Fischer 1982）フィッシャーのモデル。

→社会関係は、人びとが一定の機会-制約のもとで選択した結果であると考える。

●構造的機会・制約

人びとが社会構造上に占める位置による機会・制約。

1) 資源的機会・制約

内的資源：社会的地位（たとえば年齢・学歴）によって表示される身体的・精神的能力。

外的資源：一定の社会的地位にともなって獲得される金銭・権力・時間などの資源。

2) 規範的機会・制約

一定の社会的地位（たとえば性別や婚姻状態）にともなう規範的機会・制約。

●生態学的機会・制約

人びとが生態学的（社会空間）構造上に占める位置による機会・制約。

都市は、接触可能な人口量を準備することによって、社会的諸関係の選択機会を広げる→社会的ネットワークの選択性の増大。

社会空間構造（人口分布）や社会組織の空間的構成（地域における社会組織）によっても選択機会が変化する。

●社会的諸関係の選択原理

類似性原理：人びとは、自分と類似した人びとと親密な社会関係を形成する。

同類結合原理：人びとは、自分と同じ人びとと親密な社会関係を形成する。

階級的、民族的、年齢的、ジェンダー的、セクシュアリティ的....類似性が相互結合を促す。→生活課題の共有、ライフスタイルの共有が、相互結合を促す。

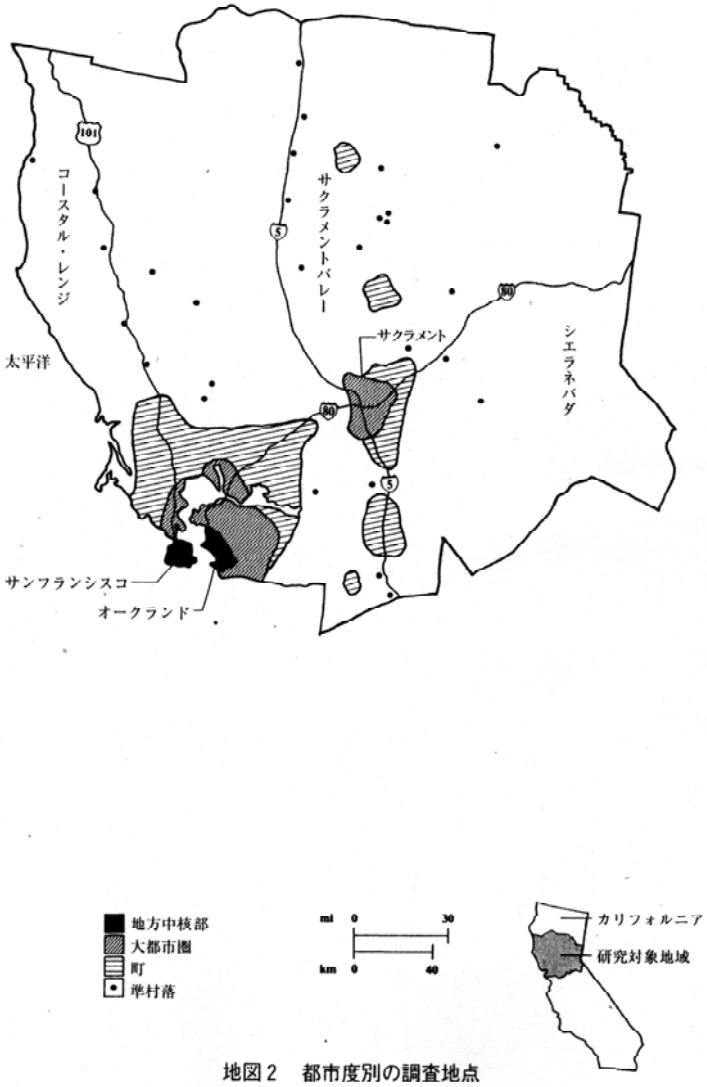
選択性が高ければ高いほど、ネットワークの同質性は高まる。

より特殊な（マイナーな）趣味やライフスタイルをもっている人同士の結合が容易となる。

都市では、民族的、階級的、年齢的分化が顕著となる。
→民族的・階級的・年齢的下位文化の生成→文化的異質性の増大。

●制度化された機関による媒介
ある下位文化を支持する人びとの数が、一定の臨界量を超えると、制度化された機関（教会、結社、新聞、レストラン、専門店、集会施設など）が成立し、下位文化は目に見えるようになる。これらが結合媒体となって下位文化が強化される。

（３）北カリフォルニア調査（Fischer 1982）
●フィッシャー自身による下位文化理論の検証。



地図２　都市度別の調査地点

北カリフォルニア地方（サンフランシスコ、オークランドを含む）の 50 地点を選び、 1050 人に面接調査を実施。パーソナル・ネットワークを焦点に、下位文化理論の検証を試みる。

●パーソナル・ネットワークの測定
「町の外に出かけるときに家の世話をしてくれる人――植木に水をやるとか、郵便物を取り出すなど」。
「（回答者が働いている場合）仕事上の決定について相談した人」。
「過去３ヶ月間に家事を手伝ってくれた人」
「最近、社交的活動でかかわりのあった人（夕食に招待したとか、映画を見に行ったとか）」。
....など 10 項目の質問で名前の挙がった人（各質問８名程度）。各人の性別、知り合った方法、とくに親しい人は誰か、などを聞き出す。
「親族」「仕事仲間」「隣人」「同じ組織の成員」「純粋な友人」に分類。

●都市度別の比較
調査地点を、地方中核部（regional core）、大都市圏（metropolitan）、町（town）、準村落（semi-rural）に分類。個人特性を調整して、居住地の都市度の効果を検討。

●親族、とくに「拡大親族」結合は、都市度とともに減少。

「正しい説明は、要するに、都市生活が人びとに親族を「無視する」ようにさせるということであるようだ（読者はこの「無視する」という表現を、親族関係の義務に拘束されることからの解放と捉えてもかまわないし、愛する親族を見捨てることと捉えてもかまわない）。都市生活は、私が示唆した説明方法によれば、親族に代わる選択肢――非親族の友人のような個人的選択肢と、おそらくは余暇活動のような制度的選択肢――を用意するということである。その結果、親族は都会人の日常生活には表れにくく、村落住民の生活には表れやすい。この説明は、家族崩壊テーゼに類似しているが、微妙でかつ重要な点で異なっている。ひとつには、私が示唆しているのは、親族の絆は非親族の絆によって置き換えられるということである。最も重要なことは、私の議論は、親族関係への関与が誰とどのような場合にかかわりをもつかに関して選択的になっているということである。都市住民は、村落の住民の劣らず、親族に頼ることができる（家族規模の問題を別にすれば）。しかし彼らは親族に頼ることが少ない。彼らはどのような場合に、どの特定の親族関係を、どのような特定の目的のために動員するかを決定するのにより選択的になれるのである」（Fischer 1982 p.83）。

Fig. 7.

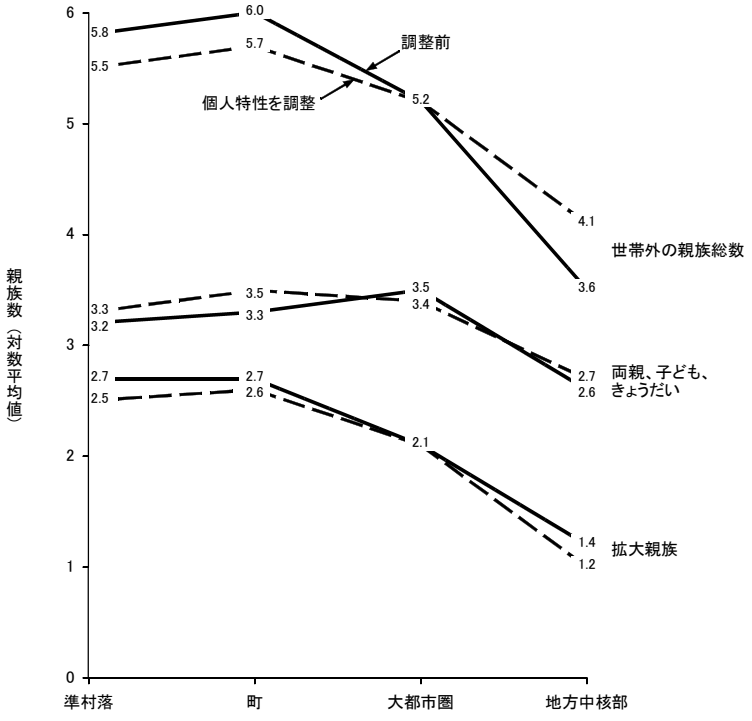



図7．都市度別にみた親族数

●隣人結合は都市度とともに減少するが、居住地の異質性と成長度を調整すると、有意差はなくなる。

「近所づきあいの多い近隣地区はまた、あまり都市的でないコミュニティであることが多かった。図 10 の実線が示しているように、準村落の回答者は最も多くの隣人を挙げ（1.5 人）、中核部の回答者が最も少なかった（1.1 人）。個人的な相違――居住年数、学歴など――を考慮しても、このパターンはそれほど大きくは変わらない。住宅の所有を考慮すると、パターンは変わる。中核部の住民の隣人数が少ない理由のひとつは、彼らが賃貸住宅居住者であることが多いからである。しかし、すべてを考慮すると――破線――、どの場所に住む回答者も、背景、住宅所有、移住の動機が同じであったとしても、なお中核部の住民は平均よりもわずかに少ない数の隣人を挙げたであろう」（p.100）。

「中核部の近隣地区の何が隣人への関与を低下させるのであろうか。ひとつの要因は異質性であるように思われる。ライフスタイルの同質性は、近隣社会への関与を促進していた。そして、中核部の近隣地区は最も同質的でなかった。もっと重要なのは成長度であった。急速に成長しつつある近隣地区の住民は、最も隣人に関与していた。しかし、中核部の近隣地区は成長していなかった（多くの近隣地区は、実際には総人口が減少中であった）。これらの地域的な特性を考慮に入れると、近隣社会への関与は図 10 の点線で示されているように、コミュニティタイプのあいだでほとんど同等であった（この図は緩やかな減少を示しているが、この傾向は実質的なものではない）」（p.101）。

Fig. 10.

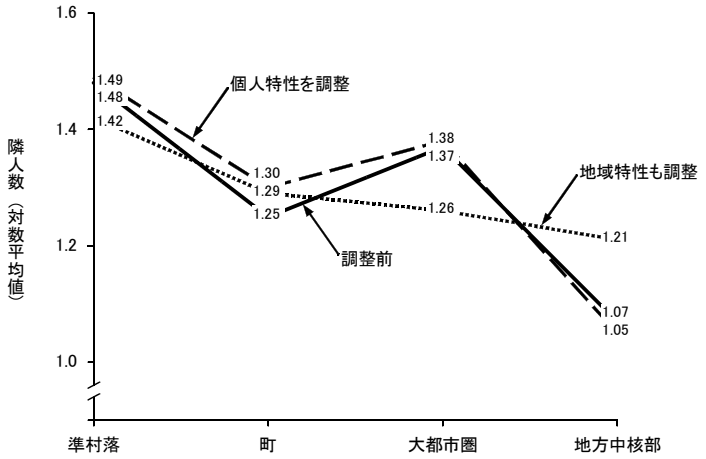



図10.　都市度別にみた隣人数

●友人結合は、制約の少ない人びとのあいだでは、都市度とともに増大する。

「都市度の効果は、なんらかの特定のタイプの人びとについてはよりはっきりと示される。私は、それらの人びととは、人口集中が決定的に重要である相対的に制約のある、あるいは移動しにくい人びとであると考えてきた。しかし、その反対が真実であるようだ。図 12 は、純粋な友人が低所得の回答者と高所得の回答者で別の結果を生むことを示している。双方の集団のなかで、都市の回答者は小さな町の回答者よりもかなり多くの純粋な友人を挙げていた。しかし、高所得の回答者のなかでのみ、都市度のなんらかの独立した寄与と思われるものがある。低所得の回答者のなかでは、都会人の年齢の若さ、学歴の高さ、未婚であることが完全に友人関係の多さを説明している。似たようなコントラストは、自動車へのアクセスがある人とない人、子どものいない若い大人と子どものいる親、男性と女性、一般に制約のない人びとと移動に重大な障碍がある人びとについても示すことができる。それぞれの対の第１のグループに属する人びとのなかでは、都市度それ自体がより多くの純粋な友人をもつことにわずかに寄与しているようであるが、第２のグループに属する人びとのなかでは、都市度は付随的なものでしかない。要するに、都市生活が効果をもっているように見えるのは、それをどのように解釈しようとも、都市が準備する社会的機会を利用するだけの自由と資源をもつ人びとにとってだけである」（p.116）。

Fig. 12.

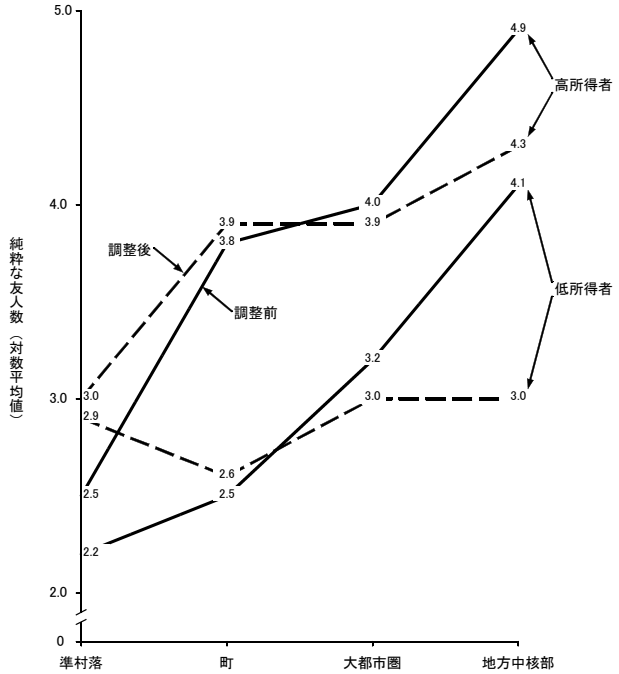



図12.　低所得者と高所得者の都市度別、純粋な友人数

●データは、下位文化理論を部分的に支持しているのみ。

「サイズ、カット、スタイルは良し。しかし、この理論のスーツはまだいくらか直しが必要である」（Fischer 1982, p.230）。